

谷本 富教授の生涯と業績

— 開拓者のひとつの型 —

池 田 進

1. は し が き



昭和11年の始めだったろうか。私が文学部哲学科を教育学及教授法を専攻して卒業しようとする頃、恒例による恩師をかこんでの卒業予餞会が催された時のことである。木村教授(当時は助教授)は御病気で欠席されたが、野上教授と谷本教授御列席の下に開かれた。その節私のはじめて谷本教授の風貌に接したのであるが、かねて聞き及びし如く、相当な大言壮語型であり、かつまた短軀の方であった。精神分析的表現を以てするならば短軀なりしが故に大言壮語型であったのかも知れない。とにかく一回お目にかかっただけであるが、印象は極めて深いものがある。しかもその席上立って挨拶されたときひとこと話される毎に一歩づつ足をふみ出され、挨拶の終りには席の向い側の壁の方に進みゆかれたおかしみは今でも目に見えるほどである。

正直に言って私はいろいろな逸話の外は余り谷本教授について知るところが無かったのであるが、今回研究紀要に教育学教室関係の物故された教授の伝記と学説につき特集されることになり、谷本教授の場合が私の分担となったので教授につきまともなぶっつかってみれば、谷本教授はいろいろな意味で今日再評価されているものであるということを見出した。最近ある長老の教育学者は大正のはじめ京都帝国大学に在学して谷本教授の天皇排撃論に感銘せられた旨述懐された由であるし、図説日本文化史大系第12巻(昭和32年9月発行)の167頁から168頁にかけて谷本教授が大正デモクラシーの開拓者、日本の教育学の開拓者として簡単ながら評価されていることは、ともすれば日本で書かれたこれまでの教育辞典類に谷本教授のことが落されていることを思うとき、甚だ興味深いものがある。教育辞典の特に人名紹介の部などに谷本教授のことがふれられないのをかねて不満とされていた下程教授のおすすももあり、かつまた現在の教育学部の前身たる文学部哲学科教育学教室の初代主任にして京都大学文部創設の委員でもあった谷本教授であるならば、教育学部の末席をけがす私としてここに谷本教授を追想するのはむしろ果すべき義務であるかも知れない。かつまた、そのひとの個性の然らしむるところかも知れないが、戦前不当に日本教育史上からその名を抹消されたかの如き観ある谷本教授の教育学者としての姿を再現し

てみるのも私達の責任であるかも知れない。少なくとも明治から大正にかけての谷本教授にはその他の教育学者に比べて遜色があるとは思われないのである。叙述を出来るだけ客観的にするため、教授御自身のことば、当時の谷本教授批判の原文を引用することにした。追憶は単なる主観的判断であってはならないと考えたからである。また主として明治から大正にかけてに関心を払いすぎたと非難されるかも知れないが、これは日本の良き日、幸福な時代への私のこのごろの興味の為らしむるところであるとともに、谷本教授の最も真剣な時代であると思われるからである。京大を去られてから大正12・13年頃までは学者的努力も継続された跡がみられるが宗教通俗講演に墮されてからは学問的には見るべきものが余りないように思われる。しかしこれは或る意味でプラグマチストの運命だろうことを考えるとき、この頃の谷本教授の活動を根本的に検討する必要があるのであるが、このことは谷本教授京大退任の前後の事情の詳細なる分析とともに、後日の課題にのこすこととした。著作も大正12・13年頃までは余すところなく挙げておいたが、それ以後のは筆者が目をとおしただけのものに限定した。とにかく後期の谷本教授の活動の分析は後日また改めてゆっくりと、大正デモクラシー期と昭和ミリタリズム期の教育分析をなすときにとり上げてみたいと思う。

谷本教授についての批評で文字となっているものの中で、私の知る限りでは藤原喜代蔵氏の明治教育思想史と明治大正昭和と教育思想学説人物史の二著の中の谷本論が詳細なもののように思われるが、そこにはしばしば後でふれる如く谷本教授に対して酷評が多い。如何なる因縁あつての酷評かは改めての機会にふれる事にして、藤原喜代蔵氏なる人の略歴は次の如くである。明治16年鳥取県に生れ、明治40年読売新聞に入り、竹越与三郎氏の下に主として教育学芸方面を担当、明治45年欧州視察をして帰朝後文部省嘱託を命ぜられ、帝国教育会の機関紙「帝国教育」の主筆をも兼ね、なお東京市講師、維新史料編纂事務局嘱託をも兼ねた。その間、岡田良平、奥田義人等に恩顧をうけたらしい。大正8年実業界に入り、昭和11年実業界を去り、昭和12年後は政府の国策遂行に協力したと氏自ら著書の巻末に語るのであるが、何等かの参考にもならばここに記しておく。

教育時論という総合的教育評論雑誌が当時発行されていたが、この雑誌には谷本教授も度々論文をのせられ、また海外たよりをおくられているし、教育時論もまた谷本教授に対しては非常に友好的であつたことも附記しておきたい。

2. 生い立ちのあらまし

谷本教授は讃岐国高松の産で慶応3年10月生れである。明治10年高松中学校に入り、11年高松医学校に転学し医学を修むるとともに独逸学を研究、在学3年一番で卒業、松山に漢文を遊学、明治15年笈を負うて東京に上り先づ中村敬宇の同人社に入って英語を修め卒業後東京大学文学部選科生となり22年に卒業した。大学在学中はハウスクネヒトのヘルバルト学風の影響をうけた。明治23年山口高等学校教授となり、のち日高真実の後を襲つて東京高等師範学校教授となり、

31年に文部省視学官を兼ね、32年秋教育学研究のため欧洲に留学を命ぜられ、英、仏、独、瑞、墺、匈、和蘭の諸国を歴遊された。36年さらに米國を視察して帰朝、39年正式に京都帝国大学文科大学の教授となったが、この間に文学博士の学位を受けられた。

谷本教授の学位は教育学関係でははじめてのものである。この時の模様を教育時論明治38年8月5日号にきいてみよう。同誌には『京都帝国大学講師谷本富氏が博士の学位を受けたる事は既報の如くなるが、右に就き博士会が査定の要旨として官報に記せる所左の如し』とのべ、論文審査の要旨は、『谷本富提出の論文中等教育の根本的革新に関する研究は、序説及本論より成り本論は凡そ7章より成る。第1章は学制如何を論じ第2章は修養とは何ぞを論じ第3章は中学校課程の自由を論じ、第4章は中学設備の新主義を論じ第5章は中学校生徒の自治を論じ第6章は中学校教授法の改良を論じ第7章は中学校教員に関する希望を論じ最後に研究要領と参考用書目とを附載せり、本論文は教育学に関する学理の理論的研究にあらずして寧ろ我邦に於ける教育制度に関する實際的研究なり故に學術論文として少しく其体を得ざるの感なしとせず然れども其本問題(教育時論にはこうなっているが其は基の誤? 筆者記)を解決せんが為めに論議する所を見るに博引旁証以て其教育学上に於ける造詣を知るに足る殊に教育学は独り理論的研究に限るべきものに非ずして又實際的研究を要するものなるが故に本論文が實際的研究を主としたるも其当を失したるものといふを得ざるなり又其論旨の如きは或は一方に偏し人をして首肯せしめ難きものありと雖も概して自由思想に富めるが故に宿弊を矯正するに裨補なしとせざるなり右の理由により著者は文学博士の学位を受くるの資格あるものと査定す』であるが、谷本教授の学問態度をよく表現しているということが出来よう。

谷本教授が京都大学教授になられる頃の事情は教授自身が大学講義全集の各集の緒言の中で述べておられるが、それによれば大体次の如くである。教授が始めて京都帝国大学に於て将来新に開かるべき文科大学の教授に採用の内談をうけられたのは明治31年まだ東京の高等師範学校に在職中のことであつた。これは外山正一博士の推薦によるものである。32年5月教育学研究のため英仏独三国へ3カ年留学を命ぜられ、なお大西祝博士と共に独逸やその外の文科大学の組織課程など取調の囑託をもうけて出発、仏蘭西を手始めに最後に北米をみて35年末帰朝、高等師範学校の方は辞し京都に移住されたが文科大学は容易に開設されなかつた。これは国費多端の折柄予算はなるべく膨脹せざる様にとの配慮によることもあるが、当時の有力者間にいろいろの因縁からこれに反対する人があつたからだと教授は説明しておられる。そこで一時はシャム(今のタイ国)教育最高顧問にといろいろと話もあつたが、いずれも見合せて当分は理工科大学講師として同科学生に教育学の一斑を授けられることになつた。話が上手なので人気は上上であつた由である。又むしろ本務であるが文科開設の計劃を種種立てられることに尽力され、いろいろな面倒があつたが、漸く開設の事にこぎつけたのは38年の冬で39年から開校に決し、谷本教授は文科大学教授に任命せられ教育学及教授法の講座を担任せられることになつた。8年後故あって大正2年8月病氣を理由に依願免官になられた。谷本教授の表現を借りれば免官の辞令を有難く頂戴せられた

京都大学教育学部紀要・Ⅳ

のであった。辞職の事情の探索は敢えてこの論文ではふれない事にし、後日に譲りたい。

京都大学時代を谷本教授は次の如く説明しておられるが、私達の教育学部のそもそもの発祥を回想するために大学講義全集の各集の緒言の中からひいて紹介しよう。そこには『…明治36年から7年にかけては理工科大学の中主として理科学生のために教育学の大意を講じ、学長始め教官講師の傍聴する所となった。翌年は更に其の規模を拡張し、法科大学の手広な教室に於て開校する事とし大学生一般に随意聴講を許す事としたが、題目は教育内容の改革として主として固陋の旧道徳旧思想を一洗すべく啓蒙的に講演したから非常の大人気で毎日数百の聴衆押寄せ、真に立錫の地を見ずと云う程であった。其の中には理工科の教官講師は勿論他科大学の職員も多く交わり、又高等学校や中学校、師範学校の教職に在る者も特に傍聴を乞はれたのが少くなかった。今度此の全集中に道徳革新論として収めたのはその時の講革である。次年は又色々の故障で理工科大学の方に持帰ったが、依然他科学生の来聴はあって156人を教えた。題目は再び教育学の大意としたが無論前前年とは全く別途に出て見た積だ。

文科大学教授としては明治39年より40年にかけては教育の進化と題して西洋教育史の一斑を講じ、これを普通講義とし翌年はその外に又特殊講義として中等教育改良論を試みた。明治41年の秋からは毎年普通講義は教育学概論を1週2時間宛とし漸次改良を施し面目を一新してやがて大成せん事を期したが、尙お特殊講義としては明治教化史論、宗教教育論を並講した。かくて更に8ヶ月程私費を以て欧米を漫遊したが帰朝の後は一転して経済学史上より観たる教育目的論の変遷と近世諸大家の宗教教育観とを説き、最後には又社会政策としての教員待遇論をも披瀝し初めた。幸に毎日多大の喝采を博し、他科学生の傍聴は未だ嘗て絶えなかった様である。』と各巻の緒言にかかっている。

教授の講義や講演は封建道徳に抗して解放的な市民道徳を教授独特の弁舌で述べられたのだから大に俗耳にうけただろうことは充分察せられるが、それだけに脱線も多かったことだろうと思われる。『其の放胆卒直な道破は主として其の個人主義的思想の言明であり、個人主義から見た旧道徳旧習慣の指摘に関する立論の態度で、その是非は兎に角、我が教育界の如きに在って、容易に聞くべからざる快論である』とは大学講義全集第2輯の末尾に附せられた道徳革新論に対する批評の中、「教育実験界」という雑誌にのったある人の批評である。さらに面白いのは同じところにのせられている、丁酉倫理会倫理講演集の『谷本君は学問が博く弁才に秀でて大学教授の中でも有数の人であることは兼ねて評判であったが、事情によって大学を止めることになった。大学に取っては誠に惜むべきことであるが、斯る成行になったのも偶然ではなく、何かそこに天の寓意がある様に思われる。深遠な学理を若干の大学生に講義することも学者の本分であることは言う迄もないが、弁才に長け例解に巧な人は学者の中にも稀なものであるからさう云う人は寧ろ一般民衆を面白く有益に導くことが一層有意義ではなからうか而して其れは決して大学の講壇以下の仕事ではない。恐らく谷本君はさういう天職を尽されんが為に左様の運命に遭遇されたものと思われる』という批評、および「日本および日本人」の『著者が狷介の性行は動もすれば世論

の物議を醸し、毀誉紛々たりと雖も、其の教育学者としての造詣に至っては何人も否認し能はざる所著者の学殖は世既に定論あり、茲に之を賛せざるべきも従来我が大学の門戸が全く閉鎖せられ、偏狭なる知識のモンロー主義により学問の進歩發達が大に梗塞を受くるの秋に当り、著者に由って従来殆んど秘密視せられし大学講義の公然世に発表せらるるに至れるは、学界殊に我が読書界のために慶祝措かざる所なり』という批評である。何かあるらしい当時の状況を物語っていると思う。これらのことばと、大正2年に奥田文相が出したという訓令（直轄学校教員の自由論議を禁止したもので後出）とを比較するとき谷本教授罷免の事情が少しうなづけるようである。

谷本教授の弁舌がさわやかなりしことは明治42年の教育時論第910号の中に、当時の博文館発行雑誌「冒険世界」がなした弁論家の投票結果の発表がのせられているが、谷本教授は5865点を得て第12位になっている。参考までに上位者を第1位から順にかくと、花井卓蔵、大隈重信、河野広中、武富時敏、犬養毅、島田三郎、大石正己、井上角五郎、尾崎行雄、高橋秀臣、田中正造の順で、谷本教授の下位は長谷場純孝、佐々木安五郎、渋沢栄一である。政治家に伍して堂々たる進出である。この弁舌を以って全国を講演行脚されたものである。貴族主義の大学のモンロー主義が許さないのも首肯出来る。藤原喜代蔵氏によれば『彼（谷本教授）が天下第一流の名声を博したのは、その学説の優秀性よりも、彼が独特の自己宣伝の優秀性による所が多い。要するに、彼の名声は、自己宣伝と雄弁の力によって生じたものに外ならぬ』（明治大正昭和思想学説人物史第1巻672頁）のである。また『彼の精力的な雄弁は、誠に驚くの外なく、1,000人以上の聴衆を前に拡声機も用いず、一杯の湯も飲まず、4,5時間の長舌を揮うということは、到底常人の及ぶところではなかった。しかも、「讃岐に偉人が三人ある。弘法大師と柴野栗山とそして…」というような自己宣伝もまた天下第一流であった』（同上）そうである。はしがきにもふれた如く、藤原喜代蔵氏は谷本教授に対しては猛烈な反感をもっているから氏の谷本評には自ら限界があろうとはいえ、前掲書672頁から683頁にかけての論評は谷本教授の個性を知るには有力な資料となるものであろう。悪口を言われることは八方美人よりは少なくとも有能なことを証明するものであるから藤原氏の谷本観を次に少しく紹介しよう。

かって谷本教授のヘルバルト強調時代に東京市小学校教員の講習会で教育学を講じた時の出来事である。この会は時の麴町小学校長多田房之輔（藤原氏によればこれ亦札附の人物なる由）に対し谷本が懲慚したもので、そのとき成るべく人数を集めたいから、報酬はもらわなくともいいから会費をなるべく低廉にし、出来たら無料にしてくれとの谷本教授の意志だったので、多田は大いに徳とし、会員500名許りの講習会を開くことになったものである。会が終って多田が金10円を報酬のしるしとして贈ったのであるが、谷本教授その小額に大いに怒り、多田等が自分を利用して金儲けしたのだと悪評した。この会は聴講料1人10銭、総額50円余りの収入があった筈だから、その半額も自分に贈らないとは多田等がその私腹を肥したに違いないと谷本教授は考えたらしいのである。多田にしてみれば最初の谷本教授の意向により会費を低額にして会員を多く集めたのであって、諸入費を引けば後に残る所少なく、10円の金も苦しい中を無理して出した金だと

京都大学教育学部紀要 IV

いうのである。爾後二人は犬猿の仲となったという。谷本教授の京都に去るや、多田は『彼れ関東で旗揚げをなし得ないで関西に行く。自分も今は敢へて深く彼を追窮しない』といったと藤原氏は言うのであるが、真偽はともあれ、面白い一幕である。藤原氏はまた面白い例をあげている。それは、谷本教授が講習会に招聘せられるようになってからは講師の報酬が一齊に暴騰したから地方教育会にまねかれた東都の学者達は谷本教授に頌徳表を奉ろうという話があったというのである。明治35~36年頃の相場では講習会講師の報酬は2週間50円前後が普通で、多くても100円の上に出ないのが例であったのであるが、谷本教授が講師として招聘せられるようになってからは300円以上500円を普通とし多い時には1,000円以上の巨額を要求する先例を開いたので他の一般講師の報酬標準を暴騰させるようになったからである。もし地方の教育会が資力乏しく出し得ない時は谷本教授は一策を案出し、表面上の報酬額は彼の要求通り500円乃至は1,000円とし、内、半額を谷本教授から更に教育会に寄附することとし、彼の実際に受ける報酬は約定の半額で承諾するという形にしたという。何故に谷本教授はかかる俗芸をしたのだろうか。『他にもない、一つは地方の教育会が多額報酬の支出をも厭わずに、強いて彼を招聘しようとするほど、彼の名声徳望の高いことを吹聴しようとする心事にもとづくものであり、二つには別の教育会に招聘せられる場合の報酬相場を低下させまいとする予防策としたのである』と藤原氏は説明する。谷本教授今もし世に在りたらば、税金の問題とこのトリックを如何に絡まされたらだろうか。何はともあれ谷本教授は早く生れすぎられたようである。その他自己宣伝の名手であったことをいくつか藤原氏は引いているが、彼の毒舌は故教授の名誉のため紹介するのをやめることとした。その生活に於て徹底的なプラグマチストであったことの儒教的道義感との衝突が谷本教授の人物の評価に大なマイナスとなっていることは争えない。今日まで生きておられたならば日本教育学会会長たること位は先づ間違いないところである。

京都大学文学部50年史より当時の谷本教授を偲ぶうるほほえましい風景を抜き出して紹介しよう。この50年史の462~463頁にのせられてある西田直二郎氏の文章の中に次のことが書かれている。『……哲学科の大教室で谷本富教授の「教育学及教授法」の講義がある時、突然内藤先生(内藤虎次郎氏)が戸を開いて入り来られ、教室の中で焚いているストーブのところに椅子を寄せて教育学の講義を聴かれたのであった。谷本教授はそのころ雄弁天下一を以て自ら任じ、その教育学の講義そのものがそのままに教授法を具現している、と自ら称していた。内藤教授は、即ちそれを観に来られたのであった。教壇上の谷本教授はいよいよ得意になり、声を一層大にしてそのままに教授法の範を示す教育学が講じられていったのであった。講義の間、ときどき高い教壇から下をのぞみ見て言葉を挟んで「どうだ、内藤君—谷本の講義はうまいものだろう。」と云った。内藤教授はストーブに手をかざしながらあの童顔をほころばせて、教壇を見上げつつニコニコしておられたこと今も目の前に浮び来るように思われる。かようなほほえましい情景を、学生たちは心ゆく悦んだのであった。ここにも京都文科大学創立ごろの大学たるものの雰囲気がよく窺われるように覚える。当時東京大学から来た友人が、京都の文科大学の教室、教授、学生の

生活を見て、「私塾」のような感があるというたが、まさに一家のように和気親愛の心濃やかな裡に京都の文科大学は伸びていったのであった』と。日本の豊かだったころの大学風景である。この豊かな時に思う存分しやべりまくられた谷本教授は日本最大の幸福児だったのかも知れない。この頃の教育時論たとえば明治40年の第782号を見ると教育雑話というトピックで谷本教授はいろいろと語られる。例えば京都大学文科大学については、『第1回入学の学生には教育学専攻志望の者が最多い様だ、それに亘くのが倫理学と心理学とで其他はまだ極めて寥寥たるものである。同大学では各教授、其の担当の講座に關係して、普通講義と特別講義と演習とを行う責務あり、且つ科外に洋書の講読を負担することになって居る。で教育学教授法講座では今年普通講義毎週三時間と、外に教育書講読毎週2時間だけ遣っている。所謂普通講義は西洋教育史を、教育事業の發達、進化と云う方面から一貫して観て行くので、先年高等師範学校で講じたことのある「新体歐洲教育史要」などとは、稍稍似て全く別なものである。而してこの講義は兼ねて教育並に教育等の問題を提示する方便として、どこ迄も研究的態度を取って行く様にして居る。講読はラインの小教育学である。来学年の事は未定ぢや』と語られる。特別講義というのは現在の私達の学部の研究に當るもので、京都大学文科大学ではこの特別講義の題目は毎年変えることを原則とされていたが、これは谷本教授の説によると教官達を勉強させるためのものだそうである。そのため勉強しすぎて病没するもの多く、小西教授が文学部長をされていたときは葬式部長といわれるほどだったとは高橋俊乗教授より承ったことである。また谷本教授は、『近頃僕の読んだ教育書では瑞典のエレンケー女史の「児童の世紀」が最面白い。又米国のウイルソン女史の「教師と両親」もなかなか好い本だと思う。就中「児童の世紀」は実に新教育の予言とも称せられるものである。僕の「新教育講義」と「系統的新教育学綱要」の中には此等の新説は殆んど遺漏なく紹介して置いた筈じや』とのべられる。これでエレンケーの影響も知られるのであるが、近代教育の系譜としてこれまた当然のことである。つづいて、『大学でも追追附屬の練習学校を建てる見込かとは爾來数数質問を受くるが、僕一個の希望では無論小学校、中学校、高等女学校等、各種の学校を設けたく、又幼稚園もあればよいと念ずる乍併今の経済では困難だろうと心配するのじや。折角誰か富豪の寄附を待つのみである。……蓋し練習学校や実験室のない教育学教授法講座は病院のない医科大学と同様である。研究進歩が出来ない。不得止紙上の空論に流れる。ドウか真に科学として研究して見たい。何か工面をしよう。又せねばならぬ』とされている。想いは今日の私達とて同じことである。結局京都大学では実験学校附設の計画がはじめからあったといえるのであるが、今もって実現されないわけである。しかし私達の学部では実験学校などを持たない方が新しい構想で学部の發展を期し得られるのではないかと私は考える。教師が生徒を教えることだけが教育ではないのである。

大正2年8月京大を退かれる前から、即ち明治39年2月6日から竜谷大学（当時仏教大学という名称であった）の講師となられていたが、以来ずっと昭和19年3月31日まで講師をつづけられた。その関係からも谷本教授の遺稿や私信などは現在竜谷大学の図書館に保管せられているが、これ

京都大学教育学部紀要 IV

らを見せてもらっていづれ後日谷本教授の後期のことどもをまとめてみたいと思っている。逸話の種はつきぬほどあるらしいが、面白い例を1, 2紹介すれば市電の交叉的などを横切られるとき安全信号など無視して通って警察署へひっぱられ、京大出身の署長に「先生ですか」と恐縮されたり、或る会合で三宅雪嶺から「谷本トミは女かと思っていたら、何と男であったのか」と皮肉られて、以後呼び方を「トメリ」と改められたという話もある。尤も「トメリ」という呼び方については、はじめにあげた私達の卒業予餞会で谷本教授御自身は『自分は金が出来て富んだから最近トメリと云うことにしている』と語られている。しかしこれも教授独得のシャレだろう。或る会合のとき司会者がトミ先生と紹介したので「トミではない、トメリだ」と烈火の如く司会者を叱りつけられたという話も伝わっている。こんな例を教えあげれば限りないらしいが、これらも藤原流の表現をもってすれば自己拡充法の一つの手だったのかも知れない。何かわざとらしさがあったから多くの人達から谷本教授の風格がユーモラスに受けとられなかったのであろう。

かしこいお伴をつれることを忘れたドン・キホーテとして谷本教授は昭和21年身まかられたのであるが、梨庵居士の地下よりの獅子吼をききたいものである。

3. 学 風

教育学の誕生はヘルバートを俟って始まるとは教育史的常識であるが、我が国に於ても教育学の成立はヘルバト学説の導入をもってはじまる。そのヘルバートの導入に於て谷本教授は正に開拓者の第1号とも云うべきであろう。『嗚呼ヘルバト。ヘルバトの名は余輩の夢寐に懐うて忘る能はざる者なり、嗚呼ヘルバト。ヘルバトの学説は余輩の日夜唱導して怠らざる所の者なり。不幸にして其名其学説汎く行われたりと云うを得ず。而かも余輩唱導の効空しからず、其名其学説今や漸く我教育界を風靡せんとす。』とは「実用教育学及教授法」の冒頭に記された言葉である。『教育説は既に是あり、古昔希臘羅馬は措きて言はず、近世教育再興以来モンテーン、ラトク、コメニウス、ロック、ルッソー、ペスターロッター、等の碩学大家輩出し或は理論上よりして或は実地上よりして教育を説く者寡からずと雖も然れども概ね一個の論説、一個の条規たるにすぎず。即ち教育理論は既に是あらむ、而かも一個の科学として教育学を組織するは未だならず。是あるはヘルバトに始る。是ぞ其教育史上に絶倫の地位を占むる所以なる。』（前掲書7頁）と語られたのは明治27年の頃である。大体我国に始めてヘルバトを紹介したのは明治20年帝国大学講師ドイツ人ハウスクネヒトである。彼の弟子でヘルバト学者として活躍したのは谷本富、湯原光一、稲垣未松の三人である。この三人の外に帝国大学派の学者に日高真実という前途有為を囑望されたヘルバト学者もあつたが早死したから前記三人がハウストクネヒト直系となる。その外、この三人と世代を同じくする帝大系の学者に溝淵進馬（最近話題の主となっている高知県の日の丸小学校長はこの人の甥とか聞く）、熊谷五郎、大瀬仁太郎、下田次郎、吉田熊次、小西重直、福富孝季、国府寺新作、沢柳政太郎、牧瀬五一郎、立花銚三郎、村上俊江、林博太郎、

山富榎等がある。前にあげた帝大系ヘルバルト学者の三人につき、藤原喜代蔵氏は『学才に於ては谷本が最も勝り、湯原がこれに次ぎ、稲垣が最も劣った』（明治大正昭和思想学説人物史第1巻 787頁）と書いている。谷本教授を辛辣に批評する藤原氏がかく言うのだからこの評は間違いあるまいと思われる。しかも藤原氏は『彼（谷本）は全く学究的研究に努めないではない。けれどもこれがために、彼の独創は少しも没却せられていないのである。彼が著述した書籍の数は決して少くない。しかしその多くは、幾んど悉く他人の学説を咀嚼消化し、これを自己の知識として発表したもので、他書をその儘翻譯したものは一つもない。……巧みに翻譯して西洋の学説を日本式に解説し、他人の意見を自己の脳裏に収納して、これを従来 of 観念に類化させ、新たに著者自身の色彩を帯びさせて、発表する点に於ては湯原、稲垣は到底谷本の敵でない』（前掲書687頁～686頁）とのべている。谷本教授はとにかく「第一流の教育学者」の原型であったわけである。名声が実力に上廻るための誇張は今日に於ては賢明な学者の社会技術の一となっているのであるが、当時に於てはこうしたことは学者としてはさげすまれたから自己宣伝の故に谷本教授は後に過小評価をうけられる事になったのであろう。

谷本教授が本格的にヘルバルトを紹介されたのは「科学的教育学一名ヘルバルト論弁」である『此書の出版に依りて泰西の所謂科学的教育学なるもの内容は始めて我教育界に知られたるなり』と藤原喜代蔵氏の明治教育思想史（376頁）は語っているほどである。ヘルバルトを熱情こめて鼓吹せられたことは日本教育史上銘記されていることである。近代社会の学校教育に於てはその方法及近代性をもてるものでなければならず、その目的に於て近代道德の形成にあることは当然のことである。ヘルバルトはこの近代社会の教育的要請を学的体系化した人である。故にそのヘルバルトを大宣伝したとて「学商」とののしる必要ははなく、むしろ熱意に感心すべきでこそあろう。教育界に封建的雰囲気がかた多分に残っていた当時に敢然合理的新風をおこされたことは充分敬意を払うべきことである。ヘルバルト学風がアメリカに入つてはかの社会科教育(social studies)への刺戟となったことこれまた教育史の指摘するところである。日本にヘルバルト旋風がまきおこったことは何も谷本教授等の宣伝によってではなく、ヘルバルトのもつ近代風が然からしめたものでもあろう。昭和17年に書いた明治大正昭和思想学説人物史に於てあれほど谷本教授に対して毒舌を振る藤原氏が明治42年に出した明治教育思想史に於ては、『明治20年頃に至る迄は実利主義の教育思想蕩然として一代を撼動し、夫れより後は稍稍其の反動の兆候を呈して德育及体育を尊重するに至り、能勢栄先づ之を唱道し沢柳、立花、有賀、湯原等も亦之に続いて反実利主義の教育説を紹介し而して谷本富に至りて全く道德主義の根帯を強うするに至れるなり。谷本が当時自ら東洋のヘルバルトを以て任じたりしと云うも亦強ち滑稽とのみ冷笑する事を得ざるなり。遮莫、学説上に於ける斯の如き進歩は行政上に於ける森、井上等の大改革と相俟つて明治の教育に一新紀元を劃せり。本邦の教育も此時に至りて始めて世界文明国の伍伴に進入したるの觀あり。』（380頁～381頁）とのべているのは藤原氏も同時代人として共感を以て谷本教授をみているようである。これが昭和になって何故ひどく谷本教授を罵倒するのか。詳しく

考察は別の機会に譲るが、何回も云うが如く谷本教授の個性に問題があったのであろう。

谷本教授のこの頃の学問傾向を知るよすがとすべく、实用教育学及教授法（ペーソンの心身相関之理の翻訳をのぞけばこの書が教授の処女作）を書かれるときに参考とされた書物を同書の引序3頁～4頁に求めよう。それには、

Stoy : Encyklopädie, Methodologie und Literatur der Pädagogik

Lindner : Encyklopädisches Handbuch der Erziehungskunde

Vogel : Herbart oder Pestalozzi ?

Ufer : Vorschule der Pädagogik Herbarts

Fröhlich : Wissenschaftliche Pädagogik Herbart-Ziller-Stoys

Schumann : Lehrbuch der Pädagogik

Drhal : Lehrbuch der Empirischen Psychologie

Kern : Grundriss der Pädagogik

Leutz : Unterrichtslehre

Scherer : Wegweiser zur Fortbildung Deutscher Lehrer

Dittes : Schule der Pädagogik

Compayre : Lectures on Pedagogy (Payne)

礼記、論語、貝原益軒の童子訓（上記原文のまま引用す）

があげられている。なほその終りに『明治27年9月20日の且皇軍海陸大勝利をことほぎつつ谷本富誌す』とある。以上ついでながら読者の谷本観に何らかの暗示あらばやとかかげる次第である。これらのリストよりしてハウスクネヒトの弟子だけあってドイツ教育学の影響の大なるものあることがうかがい知れるのである。

明治30年代から盛んに谷本教授が使われた言葉「新教育」につき、明治38年の教育時論第746号で次の如く説明されている。

『己れ所謂新教育とは、上はモンテーニュ、コメニウスより、ルッソー、ペスタロッチー、フレーベル、ヘルバルト、スペンサー等を経て、今のドモラン、ナトロップ、ベルゲマン乃至ハーゲマンとやら迄も、一切網羅して言へるもの、何事も窮屈なるは真平御免御免、一言もって蔽い申さば、凡そ自然天然の道理に背ける教育は、たとへ如何程耳新しう聞ゆとも、旧教育とか申すべき、年の新古に拘らで、只管自然を旨とする、是れ己れの主眼なり、看玉へ、曲学と謂い、阿世と謂わるる類の者は、概ね皆天理に戻れるにはあらずや、故に吾は彼の徒を悪むこと誠に毛虫よりも甚しきぞかし、個人にまれ、社会にまれ、家も、国も、唯一つの道理は、自然のみ、自然の道理ならでは古今中外一貫せんものあらじ、吾、人各皆順天と謂う事こそまことに幾千代経とも易らぬ原則なれと心得たらましかば、始めてあやまち寡からん乎、モンテーニュ、コメニウス、ルッソー、ペスタロッチー、フレーベルなど、其の説く所は咲乱れたる草花の千紫万紅とも称ゆべけれど、孰れも皆それに外ならず、ヘルバルトの教授論も亦其の本をたださば、遺に人間心性の

自然に順わんと専ら工夫を凝らしたる者なるべきを、凝っては思案に能わざる喻もありとて、末末の輩やがては形式の杓子定規に泥めること、洵に洵に残多き事とや申さん』と。これは国学者の云う自然主義と同じである。因襲から脱却せんと意図は充分うかがえることばである。しかしこのシャレた文が似つかわしいほど谷本教授の理論には体系性がなかったことも注意されねばならない。これが教授の結局は致命傷となったところの因である。後年の俗宗教演説、道德に於ける感情的解放主義、いづれもこの非合理主義の発展したものである。明治42年8月ある講習会で沢柳政太郎は谷本教授の「系統的新教育学綱要」を批評して『兎に角茲に書いてあることは、谷本君が教育学は人生社会の教育という現象を研究するものであるという定義とは違って居る』（沢柳全集第1巻 290頁）とのべていることは谷本教授の学風の痛いところを突いた感がある。この書の第1章の冒頭で谷本教授は『教育学は教育と称する人生社会の現象に付いて研究する一個の純正科学なり』とのべられていることは誠に新しくして正しい定義なのであるが、同書は人生社会の教育と云う事実を捉えて論じたものでないとの沢柳氏の批評は正に急所をついたものである。

明治39年の教育時論 763号には谷本教授の言として、『吾人の今日の立脚地たる新教育は、寧ろ社会的教育といわんよりは、以て個人的教育と叫ばんとす。これ敢て立論持説を漫に更改するものにあらず、我が国情に鑑み我が教育の現状に省み、大に然らざるを得ざる所以のものありて存す、……将来の教育等に二の目的あるを語む 1、人間は、文明の一定の度まで発達するには、国家を離れて生存すること能わず。2、一国の品位、勢力は、その一国を組織しつつある一個人の品位勢力の如何に依る。

つらつら世界各国を大観するに、我が日本の如く、国家心の発動の完全なるものを見ず、この一点に於いては、日本は実に万国に冠絶すというべし、然るに、一個人の品位勢力を見るに、実に寒心に堪へざるものあるなり、一個人の道德、一個人の智力体力、果して欧米の各国民に対して漸色なきを得るか、個人の品位勢力の衰耗墮敗実に驚くべきにあらずや、故に今後の教育は、国家心の発動よりも、個人の智徳発展を主眼せざるべからず、これ吾人が、前に我が国情に鑑み、又我が教育界の現状を省みて、個人的教育を重要視すと説きたる所以なり、ベルゲマンは謂う、「教育の目的は社会心を発揚するに在り」と、即ち多方面の教育を施して、各個人の品位と勢力とを向上せしむべきなり、而して人は一面に於いて独立自由なるとともに他の一面に於ては社会全体に尽力すべしと主張せり、吾人も大体に於て、ベルゲマンと同主義たるを信ず、然れども、その主とする所と客とする所と、いささか差異なき能わず、ベルゲマンは「社会即個人」と断じ、吾人は「個人即社会」と論せんとす、べ氏は社会を主とし吾人は個人を主とす、精言すれば吾人の人心を推拡したるもの、すなわち社会心なりと云うに帰す。個人の心を完全に発達せしむれば、従いて国家心も社会心も発達するものなりとの断案なり、何が故に個人即社会というか、べ氏の如く社会即個人と断じ、社会を主とするときは、世の進歩を遅緩ならしむるの虞なきを保せず、社会には沿襲の永き、習慣伝説ありて存す、故に敢て個人を無視せざるまでも、亦いささか

保守主義の傾向なき能はず、これに反して個人を主とし個人即社会との主義なるに於ては、自己を拡張すれば即是社会の拡張なりとの意義なるを以て、吾人は一日も以て進歩なかるべからずこの理によりて、吾人は今後の新教育に於いて、教育家の立脚地点として、個人主義の教育を鼓吹せんと欲するのみ、豈他あらんやあらんや』と紹介しているが、この終りの方にあらはれている自己拡張の感覚は膨脹していく日本の国情をそのまま自己の心理に反映されたものであるともいえよう。

ヘルバルトから出発された谷本教授が如何なる学問的段階および系譜をその後経過されたのであるか。私は先づ教授御自身のことばに求めてみよう。昭和4年に出版された「宗教教育の理論と実際」の中で、『…モナス社の日本現代教育学大系第二巻に……谷本博士の教育学が載って居り、其処には博士の教育学説には、凡そ四期を劃することが出来るとしているのである。第一期はヘルバルト派の盲信盲崇時代で「実用教育学及教授法」（明治27年）と「科学的教育学講義」（同28年）が代表的著述であり、第二期は一国の隆盛繁栄を旨とする教育学説の時代で「将来の教育学」（同32年）が代表する。第三期は新教育即ち新個人主義の時代で「新教育講義」（同39年）「系統的新教育学綱要」（同40年）があり、而して最後に第四期は又実験を尊重する時代で、博士会心の大著「最新教育学大全」上下二巻（大正12年）があると云っている。これは当然と雖も遠からずで、ほぼ要領を得ていると認め、窃に感謝したい』（前掲書135頁—136頁）と御自身言われているのであるから私もこの区分による方がいいと思う。それにひきつづいて『自分は青年時代に早くスペンサーの「教育」と題する論文体の小冊子を通読して深く感激し、又大学に入つては、恩師外山博士の指導で、いよいよスペンサーの学風に浸染したが、妙な都合で、ドクトル・ハウスタネヒト先生の勧誘黙し難く、ヘルバルト派教育学の伝授に身を委ねる様になった。それが初度の海外留学で、復々新個人主義となり、後ち乏しきを大学教授に承けてからは、専心一途斯学を堂々たる一個の社会的科学とし、それには自然科学の法則に基いて、実験的根拠を与へようとして、さて漸く出来上つたのが右の教育学大全であつて見ると、我ながら眼高手抵を恥入る外ない』（前掲書136頁—137頁）と説明されている。この教育学大全にまとめられる迄の谷本教授の教育学はまことに科学的にして合理的なものである。

「最新教育学大全」は大正12年に出版された上下2巻の浩瀚な書物である。これは大学講義全集の第4巻「教育学概論」として出される筈のものを都合によりこうした形にして出版されたものである。エンサイクロペディア風の書物になったことについて、『蓋し自分の此の著作が斯んな風に色々特徴のある様になったのも、又独り自分が夙に時勢の進運を看取し得て、思潮の流るる儘に棹さしつつあるからだと謂うばかりではない。その間外面からの刺戟や暗示を受けて動かされた所も少いとは謂はぬ。就中十数年前に公にせられた郷人伊賀駒吉郎氏の日本教育学の企図や同窓沢柳政太郎博士の実際的教育学の提唱や、さては末見ながら近頃雑誌や著述で頻に日本在来の教育学者を批評し罵倒されて居る渡辺政盛氏の奇抜な意見なども皆相応に影響を及ぼして居ることは拒否し得ない。併しそれよりも尙ほ大にしてはスタンレー・ホールを初とし、デュッエー

谷本富教授の生涯と業績：池田

やソルンダイクやさてはオイケン、モイマン等に負う所は頗る多く特にモンローの大辞典が新に出来たので利用した個条は一一列挙に暇あらず。又思想の方針としてはベルグソンやラッセルと自ら其の轍を一にしていることも認めざるを得ない。自分一家の学風としては最初ヘルバルト派の驍将を以て自任し、随分激しく奮斗したものが、「将来の教育学」に於ける社会的色彩より、「新教育講義」時代の個人本位論となり、転転して終に斯んな様のものに迄上進して来たことを回想して看ると自分ながら感慨無量たらざるを得ない。マア一言すればプラグマチックとでも申さうか』（最新教育学大全上巻6頁—7頁）と自序の中に語られているが、この終りの『マア一言すれば云云』の句はまことに当を得たことばである。思えば教育学者と名のる人の共通の型を示すものでもあろう。



この書の第3章で教育学の研究法をのべられているが、観察法、アンケート、統計、錯差、各種の曲線、相関と相関係数、比較法、伝記法、実験法等等、今日使われている方法につきすでに説明を加えられている。教育学を科学的なものにしようとの熱意は充分うかがえるのである。教育学研究の範囲につき、前頁の図表の如く（前掲書88頁）整然と分類されて同時に教育学大全の組織とされている。なかなか体系的なことである。教育学を一個の社会的科学たらしめようとして科学的たらんとされたこと、教育学の範囲を学校に限らず家庭と広く社会一般にも推し広げられたこと、日本の教育ということに重きをおいたこと、具体的實際的たらんとしたこと、アップ・ツー・デートたらんと努力されたこと等教授の抱負は大きいのである。何はともあれ本書上下両巻により一応教育学はその体系に於て形をととのえたと言えるであろう。しかし一面それだけに深く内面に向って掘り下げていかうとする点に於て欠くところなしとしないが、このことは谷本教授ひとりの傾向でなく、一般に教育学を専門とする人達の共通の傾向でもある。簡単に公式的結論を速製して時事問題を批評して具体的と誇る、教育学者独特の傾向は、谷本教授に於て著しく見られることは谷本教授を非難する前に私達自身も大いに反省のよすがとなすべきでもあらうと思われる。何故かなれば教育学者の誰しもが俗耳に入り易いものを扱い勝ちになり、そのことが教育学の学問的発達を阻害していることに気付いていないからである。

谷本教授の学問的触手が明治後期から大正にかけての日本の第一期デモクラシーの時代に如何によく動いたかはこのころの教授の諸著作によくあらわれているが、新しい教育学説を一番はじめに日本に紹介したのはいつも自分であると口癖の如く言われるだけに、その該博な知識にはまことに驚くべきものがあるのである。晩年のものには俗宗教的マンネリズムにおちいられて些か読むにたえないものが無きにしても非ずであるが、大正の半頃までの教授の著作の勉強振りには私達の範とするに足るものが多々あるのである。明治31年5月に東京大学内の哲学会で学風七変論なるものを発表されて、日本の教育の動きを史的にとらえられ、第一神習式（開闢より大化の頃まで）第二文華式（奈良時代）、第三情操式（平安時代）、第四質実式（鎌倉時代）、第五意気式（戦国時代）、第六道德式（徳川時代）、そして最後に第七発展式（明治時代）と類型づけられたが、大正になるとこれだけでは足らぬとされ、ここに考えられる新教育風をデモクラシー式と名付けられたことなどは素朴ではあるが谷本教授のダイナミックな史眼を示すものであろう。また現代の教育思潮を分類されて、第一実験的教育学、第二人格的教育学、第三道德的教育学、第四美的教育学、第五性的教育学とあげてこられる辺りなかなか才気溢るるの感がある。そして更に第六社会的教育学をあげられて最後に労働的教育学をあげられていることは興味あることがある。尤もこれらは教授のひとり舞台ではなく、それぞれ当時の教育学者がそれに振り当てられているのであるが、この教育学の幅の広さは私達にとって刺戟とすべきものである。大正デモクラシーの逞しさをも亦示すものといえよう。この労働的教育学は後に小西教授らによって労作教育学とされてゆくのである。谷本教授はケルシェンシュタイナーよりはガウディツヒの方をとられている。そして『デモクラシーとアルバイツ・ペダゴギックとを併せたものを以て新なる教育改造の方

針にしようと思う。』（現代思潮と教育の改造24頁）とのべられるのである。社会的教育学の眼目としては、旧慣を排斥して富めるも貧しきも、上も下も連帯して世の中を組織することをあげられる（前掲書33頁）のである。そして『権威排斥，鑄型排斥，外律排斥，抑圧排斥，旧慣排斥をして更に個性尊重本能尊重，自発尊重，自敬尊重，連帯尊重という事の如き種種の新しい学風を借り来り，更に勤労尊重のアルバイト・ペタゴギックとして，而もデモクラシーの主義を以てやったらば，蓋し始めて現代思潮に合した所の新教育改造が出来らるだろう』（前同）とのべられるのである。無為の人間を排して自己発現，自我実現をもって民主主義の教育，労働教育学とされるのである。児童本位，個人本位，人類本位の徹底が教育に求められるのである。明治に確立された徴兵制度，普通教育制度，議会制度，これらは凡て民主的なもので明治躍進の因はここにあるとされる。民主的感覚はたしかなものである。この点一方に於て明治末以来強化されてゆく保守的国家主義とは対立の契機をふくむことになるのである。「天皇のために」日本が躍進したというような考え方には鋭く反発される市民感覚を谷本教授はもたれているのである。しかしデモクラシーはどこまでも政体の議論であって，国体の議論ではなく（前掲書82頁），国体とは国に於て持つところの特色であり（同上）『畏れ多くも皇室は天照大神の御裔として，天津日嗣の高御座にましまして，天壤と共に窮り無く，六合に照臨遊ばされること，猶ほ太陽の如し』（前掲書82頁—83頁）というのが日本の国体であり，日本の政体の幾変遷にも不拘，『皇室は万世一系，宝祚聯綿，天壤無窮にましますと云う事が即ち固有の国体』であるから，デモクラシーの政体をとっても国体に差支はなく，『嚇嚇たる皇室の稜の御下に於て，デモクラチックのアルバイト・ペタゴギックを行うと云うことが今後の日本国に於ける思潮であり教育学の方針である』（前掲書83頁—84頁）のである。この点に谷本教授一否共産主義者をのぞく凡ての日本人の進歩の限界が見出されるのである。だからこそ政治に対するミリタリズムの攻勢の波に凡ては泡沫の如く消え去ってゆくのである。「金匱無缺の国体」「万邦卓越の民族文化」等々の意識が，個人本位とか人類本位とかいう考へと平気で共存しうるような程度のデモクラシーなのである。谷本教授を革新的立場の人と解釈することは妥当ではない。変化に適応することに巧みな保守的立場の人であるにすぎない。人民民主主義の立場からみるならばむしろ保守反動の人ですらあるだろう。私は谷本教授を非難してかく云うのでなく，谷本教授を当世風の前衛的先駆者とみることに對して肯定しないことを示すだけである。先き走って事を批評するジャーナリスト的感覚を進歩と解することは的はずれるも甚しい。時々気の利いた批評をするということは何も進歩のメルクマールではないのである。しやれは進歩の象徴ではない。ただ谷本教授には齒に衣せず，所謂ヅケヅケものを言う卒直な処があっただけは事実である。道徳問題についてもその態度に於て道学者先生に見受けられる偽善者的態度はなく，大胆な意見をはかれることが多かった。たとえば，「夫婦以外の濫交邪淫を戒むる」相待的貞節について，『余輩は……所謂相待的貞節をさへ真にそれを守持するは困難にして又相当の障碍なくば實際稀有の事とならんかと怪むなり。勿論貞節は世態の進歩に随い又漸く進歩し来れるを疑わずと雖も然れどもそれさへ多くは外面の所見にして内実

は極めて怪しき者多し。抑る男子と女子とを比較する時は女子の方概して貞節なるは疑なし。是れ一つは女子の肉慾は時発的にして男子の如く継続的ならざると、二つには女子は通姦、懐妊乃至哺乳等のために肉慾の発動を殺滅すること多きにも由るなり。然りと雖も余輩をして極言せしむるときは、女子の爾く貞節なるは主として受胎懐妊を畏懼するに由るとす、故に若し避妊の法自在且つ正確にして而して露頭の憂なくば女子亦随分不貞の事多かるべし。……制服、所有等の快感は常に男子をして屢屢艶福に誇負せしむるのみならず、女子も亦元来虚栄心強き者ゆえ、一定の資格ある男子にして竊に女子の愛顧を懇願する者あらば案外容易に応諾するかも知れず。』

(大学講義全集第1輯道徳革新論282頁—283頁)と偽善家を激怒させるような言をのべたり、『勿論人心進歩するに従い、社会的制裁、経済的困難、衛生的危険等を顧慮するに由りて多少不貞の行を謹慎せしむるに足るべしと雖も、然れども余輩は夫婦間の貞節を完くせしむるには先づ第一夫婦常に共棲する習慣を作り我が国人の如く3年も4年も千里別居する様なる事なく、而して女子の教育を改良し、家庭の快楽を増進し、情交も肉交も共に満足して、互に他心を起さん余裕なき様になし、その上過激の情慾は可成之れを鎮静し又他の方途に由りて漏洩せしむるの策を講ぜんことを望むなり。然り而して万一堪え難き場合は一種の便法をも立てざるべからず、……凡そ斯かる場合に於ては一定の注意の下には適宜の外淫、邪淫をも許さざるを得ざるべきか。』(前掲書283頁—284頁)と今日でも物議をかもしそうな発言をし、更に『其の婦たる者嫉妬妬気起して終に離婚を申出づる迄に至らんは因より勝手なるべしと雖も然れども又之れが為に己れに対する愛情に大変もなく、肉慾も相当に満足し、子孫も生殖して而して夫婦生活上完備して不足する所なくば、それだけは夫の酒癖と一様に看做し去りて我慢するも又宜しからずやとの論あり得べし。此の際家内に公然蓄妾すると又家外に潜に之を置くとは一利一害なり。子女の教育上より見れば家内蓄妾の如きは断然不可なるべけれども然らざる場合例え家に子女なき場合に於ては或は之れを内に容るる convenientならずやと言うもあるべし。蓋し夫たる者妻に隠れて潜に之れを行う時は勢疎隔の心起るべし。妻より見るも茶屋酒を飲み歩かれるよりも寧ろ家の中にて多飲せらるるを喜ぶと一般ならんか。是れは男子勝手の理窟と言はばそれ迄なり、但し十分熟考の余地あり。』

(前掲書284頁—285頁)と甚だ勝手なことをズバズバと云ってのけられるのである。福沢諭吉の「女大学評論」に対してすら、『福沢氏の女子論は頗る傾聴すべき価値あれども立論の大体本邦従来の男子は概ね無法なりと看做し、而して女子に深く同情を表わし、其の権利を拡張せんとするに汲汲たるよりして、所言動もすれば法律家の口吻を学び、婚姻を唯だ契約一点張りにて見尽くさんとし、又頻に情交を云云して兎角肉交を輕蔑し度外視せる如くなること多し。共に人情の自然に遠しとす。……抑婚因は肉慾満足、生殖保存並に生活完備の三要件を具備するを以て最完全なるものなりとすと。知らず福沢氏の論の如きは単に生活完備即ち苦樂共愛と云う一点をのみ主眼とせるにて依然一種迂闊の道徳談たるを免れざるなき手。』(前掲書278頁—279頁)と批評されるのである。女性観に於て勢余って遂に馬脚をあらわすの感がある。諸諸方々の講演にてもこうした俗受けのする話といふ弁舌巧みになされて、うけに入っていたことであろうと思われる。

こうした点にも谷本教授の不人気の因が存したのではなからうか。結論は普通と些かも変りがないのであるが、話を面白くされんとして引例を突飛なものにされた傾向があるように思われる。話が上手であったことが却って谷本教授の学者としての生命に禍したように考えられるのである。前述の蓄妾論にしても話の面白さにつりこまれると蓄妾讚美のように受けとれるのであるが、教授の見解は多淫の男子の救済策としてのべられているのである。断種論を唱える程世の中はまだ窮屈になっていなかったのである。高潮の波にのった市民社会のイデオログとして人間感情の解放をとかれている迄のことであって道德否定では決してないのである。

新しい時代の息吹きにのって谷本教授が道德論に於ては決して保守反動でなかったことは強調されていいことである。市民社会の道德論をしっかりとふまれていたことは、国民道德を特殊道德とみなし、国家の自衛のため、国内の危険思想に対抗するものとみる見解や、国民の守るべき道德にしてその基づく所は国民固有の歴史とし、国民に特有の発展を為し来れる道德の故外国文物の翻譯にては不可なりとする見解に対して即ち国家本位に考える立場に対して、教育勅語をとり上げつつ『長くも教育勅語は古今に通じて謬らず中外に施して悖らずと仰せられたる程なればそれは頗る普遍のものにして何も必ずしも特別に日本国民の一種固有の道德と謂うを須ひざる様にも想わるるが如何にや。勿論此の教育勅語は試に分段すれば三となり、序分・正宗分並に流通分ありと見て可ならん。その序分即ち冒頭の一節は祖宗建国の由来、変世濟美の邦俗を挙げて国体の精華なり教育の淵源なりと宣り玉へるなりと拝し奉れば憚ながら、所謂歴史主義とか民族本位とかと呼ぶも必ず不当にあらざるかも知れず。既に歴史主義たり民族本位たりとすれば如何にも国民道德と高調して可ならん。さるにても正宗分たる中段には実に単に公私倫理道德の項目を列挙せられて未だ一々特殊の實踐方法を示し玉はず。是れやがて流通分の末段に左の通り古今中外云々の賛辞も仰せられたる所以なりとせば復必ずしも旧来の歴史に拘泥し、民族固有の旧慣故俗をのみ墨守するに及ばざるかも知れず。現に明治維新の宏謨は実に開國進取の四字に尽きたり。而して元年の御誓文中には旧来の陋習を破り天地の公道に基くべしと曰い、知識を世界に求め大に皇基を振起すべしと曰い玉へり。是れにても只単に窮窟なる歴史主義ならず民族本位ならざることを窺うに余あり。特に今大正9年1月13日平和克復の大詔に於て万国の公是に循い世界の大経に仗りと仰せられたるは一層之れを闡明にし得たりと謂うも、妨なからん』（最新教育学大全上182頁—183頁）と論じて居られるところからも充分にうかがえるのである。又忠孝を論じて、『凡そ忠と謂い孝と謂う共に君父に対する奉順に外ならざるは論なけれども、更に詳論すれば孰れも同情感謝報効の三部より成ると思わる。それを忠にして見れば君上の叡慮に同情し奉りて国家の安寧、社会の進歩を心掛け、仁恩に感謝すると共に各自奮励して業務に従事し、公益を催進するに努め、一旦緩急あらば義勇奉公すべく之れを孝にして見れば、父母と喜憂を共にし、家門の繁昌を志し、可成順従扶養を怠らざると共に、各自寧ろ立身出世して大孝を建つべし。此に於て忠孝両全必ずしも難からずと思わる。個人存在亦掩蔽せらるるなからんか』（道德革新論 236頁）と市民道德的解釈を施しておられるのである。ショーヴィニズムに対しては谷本教授はたしかに進歩的であ

る。また停滞をもたらす凡てのものに対して反発を致さるる点に於て正しく進歩的である。『人生社会は変動性なり、常に動きて未だ定まらず。然かも其の際に立って又習慣の固定性を違くするあり、毎に社会の動揺に反抗すること少からず。但最後の勝利は固より変動にあるべし』と「道德革新論」の冒頭に書かれるのである。『社会変動する時未だ曾って退歩はあらず、社会は動けば則ち進む。古今社会の凋落衰廢するは唯だ其の固着不動にして停滞する際に醸さるるなり。猶ほ瀦水の数数腐敗するあるも流泉の未だ朽壞せざるが如し。語を変じて云へば凡そ一社会に於て習慣の桎梏愈繁縛且緊密なる時は当該社会は早く已に衰運の兆あとり知るべし。近時創造的進化を唱うる者あり、真に吾が意を得たりとす』（道德革新論2頁）の言もまた谷本教授の根本的立場を示すものである。『凡そ社会は動けば則ち進む、是れ社会的生活の特性なり。従って社会の改良を企つる者は先づ何は措きても社会の固着を防がざるべからず』（前掲書5頁）である。こうした動的見地から道德について当時としては大胆な意見をのべられるのである。道德革新論第9章のはじめに『以上諸章に於て講述し来りたる所は或は時に破壊的なるに過ぎたりとの非難もあるべし、余輩亦残念ながら敢てこれを甘受するを憚らず、是れ旧習革新に急なるの不得已に出でたるのみ。然かも余輩又固より決して破壊を好む者にはあらず、破壊は只是れ更に一層善良なる者を新に構成せんとするに先だちて理論上一個の方便とし順序として之れを説くあるのみ。総じて実際の事は固より決して急激急暴の手段を濫用するを許さず、若し漫に急激狂暴の手段を弄する時はたとへ目的志望善良確實なるの場合に於ても大概失敗挫折を免れざるべし。』（前掲書338頁）と弁護されているが、保守固執グループより見れば破壊的にみえたこと想像に難くない。当時湧沸として起る大正デモクラシーの叫びが支配階級の保守イデオロギーに不快の感を与えしことは大正2年7月奥田文相が出した次の訓令によってもうかがえるのである。その訓令というのを「道德革新論」13頁に記されているのを複写して紹介すれば『直轄学校教職に在る者、夏期講習会等の招聘に応じて講演をなすに当り言辞謹慎を欠き、其の結果或は我が国民道德の大本を非議し、世間の物議を醸しなどしては迷惑千万なり。言論奇矯に流れず、常軌を逸せず、毎に適切穩健ならん事を期すべく新説は断じて無用なり。蓋し近来地方講習会等に於ける講演の結果往々物議を醸したる例ありてなり』というのである。これを評して谷本教授は、『老婆親切の言真に好い哉。但し耳を掩うて鈴を偷むの譏なくんば幸なり。地方講習会等の物議多く聴へず。或は夫の岡村博士の岐阜県教育会事件などを斥すか。余輩の知る所を以てすれば文部省自ら開催せし講習会席上に於ける美濃部博士の講演こそ却て物議を醸す最甚しかりしにはあらざるか。然かも識者は未だ美濃部君をも岡村君をも難ぜざるなり。識者難ぜずして当局独り憂懼す。知らず当局者は地方中小諸学校の教員輩をひどく見くびれるにあらざるか。余輩の年来親く経験する所の如くば時勢の要求は更に遙に進める者ある如し、如何。』と言われる。この両者のかけひきは以って当時の状況を知るに足るよすがともなろう。

谷本教授が旧道德を罵倒される勇氣や口舌には一部の人気を呼ぶものがあつたことは確かであつた。教授の廻りに人も集まつた。しかしほんとうに人の心に訴えるものをもっておられたかど

うかとなると正直なところ私は疑わざるを得ない。道徳革新論の中に果して積極的に新しいモラルの定立をどれだけなされただろうか。『根本的研究と秩序と緻密と正確とを要求すべき大学講義として見れば、あまりに空虚なものであるけれども云云』とは道徳革新論出版当時の三田評論の批評するところであるが、谷本教授の言われることは、ひらき直って考えてみると少し中味が乏しいようにも思われる。今日になって谷本教授の逸話こそ残れ、学問体系として谷本教授の功績が殆んど残っていないことは、教育学に志す私達としても深く反省すべき事であろう。京都大学文学部50年史にのせられた藤田元春氏の回想文の中に(同書507頁)『就中谷本富博士の教育論は素晴らしい感動を呼ぶに充分であった。その頃……市会議事堂で弘法大師の事蹟を講演された時には滔滔懸河の快弁で一滴の水も飲まないで前後四時間一千の会衆一人も離席したのもなく博士の弁論にひきつけられて時を忘れて聴き入り、終って始めて会衆が息を入れた程の成功をおさめられた』とあるが、教授の学説体系そのものの中に人をかくまでひきつけるものを見出されないのは淋しい限りである。滞独中もウィルマン教授などを訪問されているのであるが、何故に欧羅巴の学者達の学風を学びとって帰ってこれなかったのか、不思議である。若くして神童の名をほしいままにされたと伝えられている割に余りに口の方が先き走りすぎているようである。

新しい教育学説の導入につとめられたこととともに、谷本教授の学説の傾向のもう一つは宗教教育へのそれである。これは後期に特に強く現われるものであるが、前期に於ても著しい特徴をなしているのである。明治33年に公布された改正小学校令の第1条を評してその宗教教育を欠くことを難じて明治38年12月16日京都市市両教育会主催の講演会で小学校令第1条を『小学校は児童身心の発達に留意して体育知育情育意育を施し特に道徳教育国民教育人道教育宗教教育の基礎並に公民的生活に必要な普通の知識技能を授くるを以て本旨とす』と宗教教育の言葉をいれて改正すべしと論ぜられているところにもこのことは見出されるし、明治41年秋からの京都大学文科大学に於ける特殊講義に於ても宗教教育がとり上げられている。京大に於ける講義は44年度までつづくのであるが、この間の講義に増訂を加えて、「大学講義全集第三巻宗教教育原論」として大正5年にまとめられている。本書の冒頭開講の辞に於て、『……余輩が宗教教育の必要を喋々するも又固より決して一宗一派に限らず、只だ全体上より遠観して以て宗教本来の面目を明にし由って以て其の将来に於ける活機を説し運用の方途を審にせんとするのみ』とその立場を明にしておられるのであるが、宗教教育強調に当り教授の立場の広さを示すものであるが、昭和時代になると些か仏教偏重に傾いてくるのである。しかしはじめのころは宗教研究の態度は『宗教そのものの根柢は心理学に拠って之れを驗知すべし、其起源並に発達に人類学、言語学、民族心理学、社会学に由って求尋すべく、而も其の最も発達したる信仰内容に就いては、哲学に藉ってこれを洗練し整理するの必要あり、斯くして其の實際的教育方法は又心理学並に社会学に徴して組織すべき筈なりという。即ち宗教基礎論、宗教真理標準論、宗教教育内容論並に宗教教育方法論を立つれば可なりと信ず。』(前掲書42頁)とまことに科学的に示されているのである。教授の宗教学説の系譜は、『余輩の立場を告白すれば、余輩は実は最初大学の学生としてはスペン

サーの社会学を先師外山博士に聴き、一時其の巧妙なる説明に心酔してスペンサー学説の崇拜者となり、早く之れに拠って「支那宗教論」(哲学会雑誌掲載)、並に「日本神社建築の進化」(東洋学芸雑誌掲載)を起草して世に示せり。事は明治21、2年の交にあり。後ちラングの書物に接して幾多有益なる新知識を得たれども強いて旧信を徹廢するに至らず。偶ライブチックに遊び、ヴントの民族心理学を知るや、其の説明のスペンサーに比して整然秩序あり、尙且つ議論又頗る概括なるに感ぜり。但し是れとても固より定説とは謂い難し。即ち之れより先きスペンサー、ラング等に由って形成したる吾が頭脳を、ヴントに由って一層整理せんとする者なり。グロツパリのヴントに一言言及せざるは如何なる故にや。若夫れミュラーの言語学説は多く採らず間々参考するのみ。』(前掲書86頁)と教授はのべられている。又宗教教育の目的に関しては、『斯くて吾人の称して宗教と謂う者は、実は此の靈的生活を指し従って又宗教的教育の主眼とする所は、只だ偏に靈的發展を進むるにあるは明ならん。従って宗教教育に於ては實際的には固より既成の宗教に頼るを免れざるべしと雖も、其の所謂既成の宗教なるもの精粗文野決して其の変を一にせず、乃ち宗教教育を施さんとする者は先ず予め色々の宗教体系に於て甄別する所あり、宗教教育に由って啻に該被教育者の靈的生活を向上せしむるのみならず、又以て社会一般の靈的發展を促さんことを期せざるべからず。』(前掲書286頁)と語られている。更に、『児童固有の宗教心を益々發揚して善美なる宗教的情操たらしめ、且つ之れに相応する意志あり行為あらしむると共に、理性に訴え、知識を資用して以て他の似而非宗教的迷信並びに之れに伴う所の濫行を抑制するにあり。……余輩は更に之を實際的に換言して凡そ宗教教育は宗教的情操を養い、宗教的教理を授け、宗教的勤行に習はし、尙且つ宗教的集団に加入し、社会的奉仕に尽力する様馴致せしむるものなりと謂はんとす。此の情操や教理や勤行や集団や奉仕やは実に宗教上肝要の大項目なり。若し更に大別すれば情操と教理とを併せて信仰とし、勤行と集団と奉仕とを併せて生活とし二綱五目と看做すも妨なし。総じて宗教教育には此の二綱五目ある中に於て、最も必要なる者はと云はば、信仰の側にては教理よりは情操を先とし、生活の側にては集団よりも勤行を重しとすべし。然かも情操と勤行とを比較する時は、又情操の更に一層大切なる事を認めずばあるべからず。』(前掲書431頁—432頁)と説明される。無論このころは京都大学を辞められて竜谷大学に教鞭をとられ、公立学校教育圏からははなれられていたから、このように可成實際的な宗教教育論を主張されたものと思われる。些か公立学校教育からは逸脱した宗教教育論のように考えられるのである。が宗教教育とすればここまで発展しなければならぬことは充分言えることであろう。

近代的公教育の性格と対照すれば宗教教育の公教育へのくみいれは反動的傾向であるが、明治政府が当時の諸外国と比べて可成り勇敢に公教育面から宗教教育を排除したことはもとより明治の文教指導者の啓蒙的精神にもよるのであるが、一面忘れてならないことはキリスト教に象徵される西洋文化を国民教育から排除しようとする強い政策があったことである。神道は宗教に非ずとの宣言は外ならぬ神道思想を国民公教育の中へ浸潤させようとする意図のあらわれと云うべきなのである。こうした状況と思い呑み合わせると谷本教授が宗教教育の公教育に於ける必要を強調し

たことは意義あることと言わざるを得ないのである。井上哲次郎等保守的イデオログは教育勅語を武器としてキリスト教グループの文教政策面からの追放に成功したのであるが、こうした政策状況に於て『余輩は所謂倫理修身の教授に於て少くも神仏否寧ろ所謂最大調御者に対する人間の関係を説き、而して適宜学校に於て宗教的情操を發揚するの工夫あるを望むやただ切なり。此の事に就いては仏蘭西小学校の教授細目など参考すべし。本書説く所亦自ら其の帰結を示して餘あらん。但し古神道流の敬神などは固より之れと別なり。何はともあれ苟も宗教發達の事歴を会得せば、誰人も自然に迷信の排却を急ぐ筈なり。』（前掲書521頁—522頁）とのべられた識見は高く買わるべきであろう。しかし谷本教授を反天皇主義の進歩主義者とまで規定することは間違いである。谷本教授は明治41年から3年に亘ってなされた京都大学特殊講義「明治教化の起源」の終りに於て『憲法發布の翌年（明治23年10月30日）又教育勅語を頒布せらる。国家教育の方針此に一定せり。……当時余之を承けて山口高等中学校に教諭たり、官報を手にするや、直に之れを倫理講堂に於て恭しく捧読し徐々に賛嘆し奉れりき。』（大学講義全集第2巻歐洲教育の進化596頁—597頁）とのべられているのである。又この頃よく京都市内でなされた講演の中でも日本人の長所として第1に皇室尊崇の念深いことを挙げておられるのである。天皇制を否定するが如きレヴェルの思想家では更々ない。史料の進歩的拡大解釈は学問的態度ではないであろう。ただ谷本教授は明治啓蒙時代の健全なる常識に立っておられたということは言い得るであろう。たとえば『従来世の所謂曲学阿世の徒は明治維新後過渡の状態を利用して、頻に旧風の議論を唱え、詭弁を弄して云為する所あり。特に笑うべきは彼等が我が国体を論ずるや、全国君民を網羅して一家一族とし、朝家と臣下とは長くも其の本源を一にして、唯だ太宗小宗、本家分家たる關係あるに過ぎず、朝家への忠節は即ち直ちに濶大せる孝情なりと説き做す者あることなり……兎に角皇室を国民全体の宗家視するは反つて不都合なりと思はるるなり』（道徳革新論228頁—230頁）というようなセンスである。天皇機関説をとられていたことも『今日の進歩したる学説にては主権は國家に在す、天皇は統治者に坐はして素より大権を綜覧し玉えども、天皇も亦國家の一機制なりと做すこと憲法理論上にては敢て争うの餘地なき筈なりとか。』（同上書231頁）とあることより察せられるのである。更に忠を説明して、『従つて又臣民と謂うも臣下とか家臣とかいう者とは自ら別にて、國家構成の一部なり。其の社会的階級には貧富貴賤賢愚あり乃至職業の別あれども元來臣民と謂う階級は無き訳なり。即ち今後の新國家制度に於ける忠は必らずや先ず斯の憲法上の天皇に対し奉りて勤むる臣民一般が至誠の感情ならざるべからず、即ち忠は純然たる奉公心なるべき筈なり。教育勅語の中に特に忠なれとは宣はざるなど亦用意の深厚なるを窺い奉るべきなり。……夫の漫に神話などの上のみ頼りて主権や統治権の淵源を説明せんとする者の如きも亦理窟としては必ずしも可ならず。返す返すも今後は何事も事實即ち法律制度の上に立脚すること肝要なりと信ず。』（前掲書231頁—232頁）といわれる。確かなる合理的解釈である。近代的君主國家論はしっかりと把持されているように思われるのである。井上哲次郎等一派の保守官僚イデオログに対して敵意をもっていたから、國教の仮面の下に神道などの教育への侵入を防ぐ意味で、オー

京都大学教育学部紀要 IV

ソドックスな宗教育運動を早くからなされたのであるかも知れない。

しかし谷本教授の宗教学研究には博学多読の割にみるべきものはない。ティリッヒなども昭和のはじめに紹介し、『独逸の当年の大歴史家を想わせるが、実はまだまだ大学出身の新進の一田舎教師たるに過ぎない』との形容でニーブール（今様に発音すればニーバー）を紹介されている当り（宗教育の理論と実際6節7節参照）なかなかの勉強家ではある。

当時宗教育研究のために教授が読まれたと思われる外国語文献を前掲書の小引の終りに挙げられたものを例として示せば次の如くである。

1. Tugan Baranowsky : Theoretische Grundlagen des Marxismus. 1905
2. E. Bernstein : Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie. 1923
3. E. S. Bogardus : History of Social Thoughts. 1922
4. R. W. Brown : The Creative Spirit. 1925
5. G. S. Coe : The Spiritual Life. 1900
6. G. D. H. Cole : Guild Socialism Restated. 1920
7. L. Constant : Vie éternelle et vie sociale. 1928
8. H. E. Cope : Religious Education in the Family. 1915
9. W. Dilthey : Einleitung in die Geisteswissenschaften. 1883
10. H. M. Cordin : Science, Truth, Religion and Ethics. 1924
11. E. Griesbach : Die Grenzen des Erziehers und seine Verantwortung. 1921
12. G. Grimm : Buddha und Christus. 1928
13. L. T. Hobhous : Social Evolution and Political Theory. 1911
14. E. Husserl : Ideen zur einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. 1913
15. M. Jahn : Sittlichkeit und Religion. 1910
16. E. Kriek : Philosophie der Erziehung. 1922
17. K. Lehmann-Issel : Theosophie. 1927
18. G. Mehlis : Die Mystik. 1927
19. A. Menzer : Der neue Staat. 1902
20. A. Messer : Pädagogik der Gegenwart. 1926
21. R. Müller-Freienfels : Irrationalismus. 1923
22. K. Niebuhr : Does Civilization need Religion ? 1928
23. R. Otto : Das Heilige. 1926
24. F. Rittelmeyer : Von Lebenswerk Rudolf Steiners. 1921
25. F. W. Roman : The New Education in Europe. 1923
26. M. Scheler : Wesen und Formen der Sympathie. 1923

27. E. Spranger : Kultur und Erziehung. 1923
28. // : Lebensformen. 1924
29. // : Psychologie des Jngendalters. 1924
30. R. Steiner : Theosophie. 1904
31. // : Wie erlangt man Erkenntinsse der h3heren Welten ? 1913
32. // : Die Rätzel der Philosophie in ihrer Geschichte. 1914
33. // : Lehrerkursus am Goethenum. 1923
34. // : Gegenwärtige Geistesleben und Erziehung. 1927
35. // : Anthroposophie. 1927
36. F. Tilich : Kairos. 1924
37. A. T. Todd : The Scientific Spirit and Social Work. 1920
38. // : Three Wisemen of the East. 1927
39. G. Walter : Phänomelnologie der Mystik. 1923

これらの書は今日でも充分読める、否読むべき書物であるが、これをみても教授の勉強振りが察せられるのである。野依秀市氏等と組んでの仏教通俗宣伝に墮せられたのはかえすがえすも残念である。

が明治から大正にかけて新教育運動を展開せられたことは日本教育史上忘れらるべきではないであろう。先年教育研究事典に梅根教授が『ドモランやデューイと直接に関連をもつ新教育運動の日本に於ける発端は明治38年～9年の谷本富の京都および四国における講演であろう。谷本はこの二つの講演でレディ、ドモラン、デューイなどの主張を紹介しつつ“活人物”を作る教育としての“新教育”を提唱した。この講演が日本の教育界に及ぼした影響はさし当りは観念的なものにとどまり、実際化するには時間を要したけれども、しかし広く深いものがあつた。この時以来新教育を主張し、新学校を創立するものが漸次出現する。』（同事典857頁）と谷本教授の役割を評価されていることは私達の多とするところである。又昭和32年に出た図説日本文化史大系第12巻大正昭和時代に『近代デモクラシーの風潮を背景として、20世紀の初頭にフランスのドモラン、アメリカのデューイらによって民主的な立場にたつて児童の人権の尊重、経験主義による自由な学習を重んずる新しい教育思潮が起つた。これはブルジョア社会の発達に伴なう教育上の自由主義にほかならない。日本においては産業革命が進行した明治の30年代に谷本富、樋口勘次郎らによってまず思想的に導入された。谷本は1906年新教育講義を公にして自学補導主義の教育をとへたがこれが教育界の人々に大きな影響を与へた』（同書168頁）と大久保利謙氏は谷本教授の位置づけを行つておられる。因みに同書167頁に唐沢富太郎氏が谷本教授が京都大学をやめられてかから立命館大学教授となると書かれているが、立命館大学の教務課に問い合わせたところ、当時の教師名簿に谷本教授の名前はない由で、これは唐沢氏の何かの思い違いであろう。谷本教授がかく当時各方面に活躍せられた割合に当時世人の教授評は余り香しからず、藤原氏の如きは、『吾人は彼を以て寧ろ実力の名声に伴はざる一種の誇張学者と信じて疑はざる者、何ぞ彼を一代

の大学者なりといはんや。彼がヘルバルトを提唱して以来谷本富の名を知らざる者全国殆んど一人もなし。彼は唯有名なりという点に於ては他の如何なる教育学者にも劣らざるべく、全国の教育界に其名を知らるてふ一事より云へば、恐らくは本邦第一流と称するも敢へて過言にあらざるべし』（明治教育思想史 624頁）と酷評しているのである。京大在職時代 沢柳総長から退官を要求された原因のひとつも、同僚間における不人気が影響しただろうことも充分察せられるのである。退陣要求された原因だと谷本教授自ら語られる乃木將軍夫妻殉死に対する冷評（野上教授はこれは俗説だと一笑に付されている）も自己の不人気を挽回するための谷本教授の投機的計劃であつたという人もあるが、或いは恐らく真相をみぬいた見解と私は考える。そのあてが見事にはずれて更に不人気を倍加したことは国民感情を冷静に洞察する賢明さが谷本教授に欠けていたことを物語るものである。がこの国民感情をよみとる能力に、教育学者というものが、否教育者というものが案外欠けていることは、今日でもなおかつみられるところである。谷本教授の失敗はいづれの点に於ても私達の大に反省すべきことであらう。

かく国民感情のよみとり方に失敗はあつたとはいえ、谷本教授が心理学をも研究せられたことは、ベーンの訳である「心身相関之理」「感情の修養」「群衆心理の新研究」などの著書もあることから察せられるのである。教育学を体系化しようと努力せられた以上、心理学に関心をもたれたことは当然のことである。明治41年の頃「群衆心理の新研究」を書かれたことは甚だ興味深いものがある。『夫の騒乱一揆同盟罷工乃至学校騒動等社会の病的現象を説明するには必ず之れに藉らざるべからず』との動機からこの本を書かれているのである。この書の序の裏頁に大阪毎日新聞の予告がのせられているが、それには『仏国葡萄園の一揆、印度カルカッタの暴動、紐育の大恐慌、ヴァンクラーヴハーの排日運動、楮ては足尾、別子の暴動、各種職工の同盟罷業、学校の騒動、近くは各府県会の紛擾等は果して何に由りて起れるか或は経済上より或は社会上より或は政治上より之が解説を試みんとするものあれども未だ深く人の心理に立入りてこれを攻究したるものを聞かず。……谷本富氏は曾て歐洲留学中教育学の方面より此の新學問たる群衆心理を研究せられその造詣頗る深き由を聞き我社は特に博士に乞うに其の新研究を世間に公にせんことを以てせしに博士はこれを快諾せられ更に伊仏の大家ルボン、シゲーレ、ロッシ諸氏の新著を参考として最も通俗平易に数回の講演を重ねられたれば……最も有益にして趣味あり最も時勢に痛切なる博士の新研究を読者に紹介することとなしぬ…』とある。また明治40年の教育時論第 818号には谷本博士の学校騒動論として『……夫の我国に於て特有の顕象と看做されたる学校騒動とても亦当局者が群衆心理の理法を心得、細心注意して之に臨まば、決して未然に防遏し難きにあらざるべし、蓋し学校騒動の起るや其原因等より種種あるべしと雖も、歸する所は青年の心理は甚だ群衆的にして、常識未だ充分に發達せず、却て理想に憧憬し、時に幻影を視聽すること亦必ず珍らしからず、推理を後にして想像を先きにし、衝動暴発して極めて激昂し易く、地齒扼腕慷慨悲憤を壯とし、一二首領者の教唆に依りて雷同附和するに難からず、殊に任侠にして弱者を庇護するの義膽あり、区々法則規律を以て制すべからず、其校長教員等大人とは全く感想を異に

谷本富教授の生涯と業績：池田

するに由って意志往往に疎通を缺くことあり、是れ学校騒動の蜂起する所以なり、されば学校騒動予防乃至鎮静の第一要義としては、先づ生徒の心情を知悉するを肝要とす、即ち群衆心理の傾向変化等に通統するを要するなり、斯く当局者にして群衆心理の何物たるやを知り、予め青年者の心情を知悉したらんには、決して彼等をして、無謀の輕挙を起さしむる如きことなかるべきは疑いなし、尙これについて一言すべきは、シゲーレ氏の説に依れば、凡そ群衆の暴発は多くの規律訓練を要するものにして、首領又は張本の号令の下に統御せらるるを必要とすと云へることになるが、これを足尾、別子の暴動に徴するも毫も誤らず、別子の如きは其首領たりしは軍隊の曹長とかにて、進退懸引に軍隊の操練に則り、頗る規律ある運動をなしたれば、人人之を目標して喫驚せりと云う。乃ち今日学校に於て兵式体操を課し、青年者を軍隊的規律の下に養成するは、固より尙武教育として甚だ好ましきことなれども又一面より見れば、或は却って学校騒動暴発機会を与うるの虞なきを保せず、自分が曾て出逢いたる学校騒動は実に天長節発火演習挙行の後に蜂起したりしなり又維新前長州奇兵隊の中などには、騒動常に絶えざりしとも聞及べり、是れ確に深く考うべき事なりとす』とあるが、当時の世相と想い比べてなかなか面白い発言である。なおついでに言えば、その頃社会心理の研究の本が可成り出ているのである。例えば、明治41年樋口秀雄著社会心理の研究、明治42年小林郁著社会心理学、同じく社会心理研究、明治45年宮崎右雄著通俗社会心理学、大正2年大道和一著社会心理学大正3年大久保留次郎著群衆の心理などである。時代が社会心理への研究心を起さしめたのであろうか。谷本教授は「群衆心理の新研究」13頁に、『この群衆心理の研究を唱道する所以は貴社の敏くも着眼せられたる如く近年漸く興起せんとする極端社会主義の危険を防遏せんとする上に於て極めて必要なりと信ずるを以ってなり、若し又之により学校教員諸君が学校騒動を未発に防止するを得ば実に望外の幸なりとす』とのべられていることをここに考えるとあつてあげておきたい。

末尾記 まだまだ書くべきことがあるのだが、与えられた頁数をはるかに超えたことでもあるので続きは他の機会にゆずることにして擱筆する。

谷本富教授履歴のあらまし

慶応3年	四国高松に生る
明治10年	高松中学校入学
〃 11年	高松医学部に転学、医学と独逸学を研究在学3年首席卒業
〃 15年	上京
〃 22年	東京帝国大学文学部卒業
〃 23年	山口高等中学校教授となり後に東京高等師範学校教授となる
〃 31年	文部省視学官を兼ね
〃 32年	欧州留学 35年末帰国、高師辞任
〃 36年	京都大学理工科大学講師となる
〃 38年	文学博士の学位を授けらる
〃 39年	京都帝国大学文学部教授となる
〃 39年	竜谷大学（当時の名称は仏教大学）講師となる

京都大学教育学部紀要 IV

大正2年 京都帝国大学教授辞任
 昭和19年 竜谷大学講師退職
 // 21年 死去

谷本富教授著書要目

発行年	書名	発行所
1. 明治19年	心身相関之理	大倉書店
2. // 27年	実用教育学及教授法	六盟館
3. // 29年	科学的教育学講義	同上
4. // 30年	普通心理学集成	同上
5. // 31年	教育学講義速記録	同上
6. // 31年	将来の教育学	同上
7. // 32年	新体欧洲教育史要	同上
8. // 32年	小学各科教授法講義	
9. // 37年	戦時読本	六盟館
10. // 39年	宗教と教育との関係	同上
11. // 39年	新教育講義	同上
12. // 39年	系統的新教育学綱要	同上
13. // 39年	弘法大師	同上
14. // 39年	栗山先生の面影	同上
15. // 41年	群衆心理の新研究	同上
16. // 41年	新教育者の修養	同上
17. // 41年	新道徳（商業適用）	金港堂
18. // 42年	新教育の主張と生命	六盟館
19. // 43年	楠公と新教育	同上
20. // 43年	新教育と孟子	六盟館
21. // 43年	赤穂四十七士論	宝文館
22. // 44年	女子教育	実業の日本社
23. 大正2年	洋行土産談	六盟館
24. // 3年	時代と思想	日月社
25. // 3年	宗教の新意義	同上
26. // 4年	道徳革新論	大日本図書会社
27. // 4年	欧洲教育の進化	同上
28. // 5年	宗教教育原論	同上
29. // 6年	感情の教育	目黒書店
30. // 6年	教育界の現状打破	同文館
31. // 9年	現代思潮と教育改造	同上
32. // 9年	改造されたる婦人訓	隆文館
33. // 10年	文化運動と教育傾嚮	同文館
34. // 11年	近江商人松居遊見翁	星久商店
35. // 11年	日本文化と仏教	丁字屋商店
36. // 11年	書齋より主婦並に女学生へ	文献書院

谷本富教授の生涯と業績：池田

- | | | | | |
|-----|----|-----|-------------|-----------|
| 37. | // | 12年 | 現代宗教と性慾 | 二松堂 |
| 38. | // | 12年 | 歎異抄の新しい看方 | 大日本真宗宣伝協会 |
| 39. | // | 12年 | 日本はどうか | 文献書院 |
| 40. | // | 12年 | 新恋愛と結婚革命 | 文献書院 |
| 41. | // | 12年 | 最新教育学大全上, 下 | 同文館 |

以上は教育学大全下巻の終りにのせられたものによる

42. 年月は不明であるが竜谷大学の図書館蔵書の中に大正11年3月6日寄贈の印のある、「現代教育思潮の基調」なる仏教大学（竜谷大学の前身）出版部発行のものがあるが、竜谷大学における講義をまとめられたものであろう。主としてデモクラシーのことが解説されている。

- | | | | | |
|-----|----|-------|------------|------|
| 43. | | 大正12年 | 文化運動と教育の傾嚮 | |
| 44. | // | 14年 | 教育と宗教 | 同文館 |
| 45. | | 昭和4年 | 宗教教育の理論と実際 | 明治図書 |
| 46. | // | 9年 | 自伝 | |
| 47. | // | 11年 | 日本教育と仏教 | 秀文閣 |

追記 大正13年以降の分はもっと外にあるだろうと思われるが、後期の谷本教授を解明する時に完全なものをつくりたいと思う。